

小品「末大必折」

澤田雅弘
SAWADA Masahiro

臨書に対するいまの私見を述べたいと思い、今年も臨書を掲げるつもりで、米芾の尺牘の一段を臨書した。ところが仕上げてから悩んだ。残した二点、日を変えていくら眺めても、素直に目に入るのは、臨書として満足感のあった方ではなく、むしろ不満を残しつつも捨てがたいと残してきた方で、臨書を作品扱いする場合の難しさを痛感した。かくして、臨書を挙げるのは断念した。

毎年ながら、夏季休暇中に三、四日を割いて、学生の様々な書展の賛助出品用を書く。作品を書くのは一年を通じてほぼその数日だけであるので、書くことばも学生を念頭に選択する癖がついた。正確に言えば、選択するというよりも心に響かなくなったというべきかと思う。書こうという意欲が湧かない。この「末大必折」も学生を意識した。

『春秋左氏伝』昭公十一年に「末大必折、尾大不掉。」と見える。左伝ではこれを下層の勢力が増大すると、制御できない状況になる

ことの比喩に用いるが、「末大必折」は、樹は梢が幹よりも大きくなると折れる、「尾大不掉」は、尾が大きくなると自由に振れないの意である。両句を書いてもよかったが、本末の議論なら「末大必折」が分かりいい。そう思ってこの句だけにした。

筆は、二十歳のころに愛用し、少々買ったためであった上海工芸の「頂峰」大号の、そこそこ使い込んだ二本である。三十年は手になかった。最初は善蓮湖製の「滄海」大号を使ったが、別作から続けて使用し筆鋒が萎えた感を覚え、途中でこれに変えた。

最初は正方形に二字二字に布置しようかとも思ったが、平板になるような気がして、最初からこの布置にした。早々に仕上がると思って臨んだ。案の定、秦隸で一枚運筆してみても、仕上がりが見えた。その後、予測に反して「折」字に手こずった。下方のスペースに「斤」の足を長く垂らそうとしたのだが、うまく落ち着かなかつた。長い画になるので、ここで利かさないと、という気持ちがあった。

いに介入するようになって、自然な運びを遮った。これを自覚するまでやや時間を要した。もう一つ、「大」と「折」の上半部の字間もしっくりしないと思いながら、十枚ほど書いてしまった。が、ふと「折」の足は短くてもいいじゃないかと思いついて、上の悩みがたちどころに氷解し、そして数枚書いた。もう一枚と思つて筆を運んで「大」を書き終えた瞬間、出来るぞという予感がした。「折」もうまくいった。白が冴えて美しいと思つた。「折」の足を短くしたこと、抜けた表情が楽しいと思つた。墨が十分に乾くのを待ちきれずに吊るして、筆を擱いた。

紙は台湾画仙「厚口金龍」、墨が入りにくいので、墨を深く入れようと、これまでよりは幾分じっくり運筆することに心がけた。墨は呉竹の「磨墨液抱雲」。印は朱文「雅弘」。



末
大
必
折

17.2cm × 34.4cm